

本人の思いに寄り添う専門職の役割とは

～「思考の見える化」を読み解きます～

なごや認知症

NEWS

名古屋市では、認知症初期集中支援チーム（以下、初期集中という）の支援の質を高めるため、教則本「思考の見える化」を作成しました。認知症になっても本人が望む暮らしを実現するために、専門職として何をすべきか、その行動の根底にある思考（考え方）を明らかにしています。キーワードは「なぜ」です。

認知症の人が感じるズレの正体とは？

「認知症の相談をすると、すぐに介護保険サービスを勧められました」
「自分の思いをわかってもらえなかった」と本人は振り返ります。

自分らしい生活を続けたい（本人の思い）とサービス利用につなげたい（専門職の思考）。両者の重なりつつも相容れないズレを本人は感じています。

当たり前のことですが、専門職はサービスを導入することが目的ではなく、認知症の人が望む暮らしを実現することが目的です。しかし、例えば「買い物ができない」との相談に対して、まずは訪問介護や配食サービスの利用を勧めてはいないでしょうか。できないことをサービスで解決しようとする思考では所期の目的を実現できないのではないかと、問い直しが教則本を作成する動機になっています。この問い直しに対し、生活障害やBPSDを引き起こす原因の見える化を提案しています。「なぜ、買物ができないのか」「なぜ、スーパーまで歩いて行けない身体問題が原因なのか、家族が失敗を指摘したことによる自信喪失が原因なのか、いろいろな「なぜ」を本人や家族と一緒に考えること。つまり、できないことの原因を明らかにする思考を繰り返したその先に、「再び、買物がしたい！」という本人の望む暮らしが見えてきます。また、この思考を習慣にするためには、認知症の人の言動の背景にある本人なりの理由や抑えきれない感情を想像し共感できる力が欠かせません。

教則本「思考の見える化」は専門職に対して、これまでの支援がサービスありきの思考だったのか、それとも本人に寄り添った思考だったのかを問いかけています。



なごやの認知症の今が分かる

●発行●

名古屋市認知症相談支援センター

✉ n-renkei@nagoya-shakyo.or.jp

☎ 052-919-6622 052-913-8553

※本センターは、名古屋市社会福祉協議会が名古屋市から委託を受けて実施しています。

中村区で、若年性認知症当事者の交流の場「小さなつどい」がはじまる

2月20日（木）、中村保健センターにて、中村区若年性認知症「小さなつどい」が開催されました。この取り組みは、中村区在住の近藤葉子さん（写真中央）の「地元の中村区内に当事者が集まる場をつくりたい！」という思いから始まり、中村区南北近藤さんの思いを受け、中村区南北両いきいき支援センターの認知症地域支援推進員や中村区キャラバン・メイト連絡会が協働し、近藤さんを中心に何度も話し合いを重ねて実現しました。当日は中村区内外から3名の当事者が参加し、当事者ならではの思いを語り合いました。



参加者と談笑する近藤葉子さん（写真中央）
このつどいは今後も定期的に開催していく予定

コラム

「なぜ食べ過ぎるの？」

認知症の人の心に寄り添う？

認知症の人は一見すると不可解に見える言動をとることがあります。しかし、その言動の背景には本人なりの理由があり、抑えきれない感情があります。

レビー小体型認知症と診断された春子さん（72歳）。家族は春子さんの過食に困っていました。もともとは小食だった春子さんですが、認知症になってから菓子パンやまんじゅうなどを一度に何個も食べるようになってしまいました。そして、食べ物がないと、家族に買ってくるように要求し、それを断ると大声を出して怒り出すため、家族はダメなことだとわかりつつも食べ物を買って渡していました。こうした場合、どのように関わると良いのでしょうか。

「過食を続けると病気になるのでは」と無理にでも食べ物を渡さない」と考える人もいます。しかし、「食べ物への執着をなくすため、気分転換を兼ねてデイサービスを勧めよう」と考える人もいます。

もちろん、そうした対応が適している場合も多くあると思います。さて、春子さんの場合はどうだったのでしょうか。家族との会話から意外な理由が判明しました。

●家族「お母さん、最近仕事が多くいってないんだよね。上司とうまが合わないからかなあ」
●春子さん「それなら甘いものを食べると良いよ。甘いものは悪い奴からあなたを守ってくれる」
もちろん、春子さんの話には妄想と現実の世界が混ざっています。しかし、この会話から春子さんが甘いものに固執する本当の理由がわかりました。この日から、家族は無理に甘いものを取り上げようとせず、たくさん話をするようになり、春子さんの過食はだんだんなくなっていました。

私たちは認知症の人の言動の背景にある心のありように共感することが大切ではないでしょうか。

私たちが認知症の人の言動の背景にある心のありように共感することが大切ではないでしょうか。

「もの忘れ検診」がはじまっています！

令和2年1月から、認知症を早期に見つけて適切な治療につなげることを目的としたもの忘れ検診が始まっています。

- 対象者 65歳以上で認知症と診断されていない市民
- 実施機関 市内の協力医療機関
- 自己負担 無料
- 受診回数 年度に1回
- 健診内容 問診による認知機能検査

なお、この検診は、認知機能の低下について、簡易的に検査するものであり、認知症の診断を行うものではありません。

検診を実施する協力医療機関や精密検査を実施している医療機関は市公式ウェブサイトをご覧ください。

はい、こちらは認知症「コールセンター」です！

令和元年12月末実績
延相談 975件

令和元年度12月末までの相談実人数576件、また延件数は975件でした。相談者の内訳をみると、家族からの相談が58%と最も多く、その内訳では娘が43%、妻が23%、嫁が12%、息子が12%でした。

よくある相談例

●家族が、同じことを何度も言ったり、物をよく失くすようになった。認知症ではないかと心配。

【対応】まずはかかりつけ医に相談し、紹介状をもらって認知症の検査ができる病院にかかっていたら、よくお伝えしています。

お電話を受けたら丁寧にお話を聞き、不安な気持ちを受け止めることを大切にしています。ぜひ、お気軽にお電話ください！

1日あたりの平均相談件数（令和元年12月）
5.3件